

地域特産種量産放流技術開発事業（ホッキガイ） （要 約）

天野 勝三

平成5年度から平成9年度に行われた当事業の結果及び考察の概要について報告する。なお、詳細は「平成5～9年度地域特産種量産放流技術開発事業報告書（二枚貝グループ）」（平成10年3月）に報告した。

結果及び考察の概要

（親貝について）

身入率等の変化状況から天然海域における産卵盛期は年により変動があるものの概ね4月下旬から5月下旬と推定された。

成熟した親貝を天然海域から採取できれば、5～8℃ろ過海水で無給餌飼育しても2ヶ月程度の期間は採卵が可能と判明した。

（浮遊幼生飼育について）

飼育途中で餌料濃度を低めに抑えることにより飼育水の汚れをより少なくすることができ、比較的高い回収率が得られた事例があった。また、4個体/m^lの収容密度で十分量産が可能と判断された。

（底生稚貝飼育について）

底生稚貝飼育においては、投入する浮遊幼生の経歴をよく吟味することが大事であり、また、沈着幼生の大量へい死はほとんどが殻長1mm未満で起こっていることから飼育途中において原生動物、チグリオパス等の発生を極力抑える必要が示唆された。また、餌料プランクトンについては複数種の混合給餌が望ましいことが考えられた。また、飼育条件によっては高成長（日間成長量130～160μm/day）の稚貝を生産できることがわかった。

（中間育成飼育について）

陸上における飼育方法については、収容時に、より大型の稚貝を収容した方が取上げ時の成績がよいことが判明した。これは、陸上飼育の場合には全般的に過密飼育、餌量不足等飼育環境としてはあまり良くない状態になっており、その中でより抵抗力（生命力）の強い大型稚貝が比較的順調に生育できたためと考えられた。

（稚貝放流・追跡調査について）

放流用稚貝としては最低でも殻長10mm以上が必要と考えられた。また、潮流、波浪により逸散が大きい場合があること及び現行の種苗生産工程では放流が冬期低水温期の12月となるため、放流後の成長は20～30μm/dayと低く抑えられることから、放流後の生残、定着を上げるためには極力大型の稚貝を放流する必要があると考えられた。

（資源調査について）

平成5～9年度に三沢市沖の漁場内において資源量調査を行った。

各年度担当者：平成5～6年度、高林信雄（現、漁政課）
平成7～8年度、清藤真樹（現、漁業管理課）
平成9年度、天野勝三